Adult Attachment Interviewに関する予備的検討

佐々木靖子*1 益地山葉矢*1 本城秀次

1．問題と目的

(1) 内的ワーキングモデルについて

1980年代以降、生涯発達過程への関心が高まるにつれて、愛着研究の対象は乳幼児の親に対する愛着関係だけでなく、青年や成人にまで幅を広げている。そのため、行動として表出される愛着パターンのみならず、成人にとっての愛着対象が心的表象としてどのように形成されその機能を果たすかが問題にされている。


IWMの中で特に重要のは、愛着対象についてのIWMであり、「自分にとっての愛着対象は誰で、助けを求めるときにはどれだけ近づきやすく、どうすればどう応答してくるか」を予測する。また、自己についてのIWMは、「自分が愛着対象からいかに受容されているか、助けを与えられる人間と判断されているか」といったことが中心となる。このように、自己についてのIWMと愛着対象についてのIWMは補完的に構築されることをBowlbyは指摘している。

Main, Kaplan & Cassidy（1985）はBowlby（1969, 1973）やBretherton（1985）の考えを踏襲しつつ、愛着についてのIWMを「愛着に関連する情報の組織化における、意識的および無意識的なルール」「愛着に関連する経験、感情、観念に関する情報探索を制御するルール」と再定義している。

(2) 内的ワーキングモデルの発達的観点

Bowlby（1973）によれば、愛着対象と自己についてのIWMは乳幼児期から青年期にかけて徐々に形成される。そして、IWMの構成は人生初期の感覚運動的なものから言語的なものに移行していくという。そのため、言語感覚的な記憶には意識的なアクセスが困難となり、IWMの変化は生じにくくなる（Bretherton, 1985）。

このように、個人に内在化された愛着は基本的には時間的安定性を持ち、幼少期と大人になってから示される愛着スタイルや愛着表象の間には対応関係があるとされている。

しかし、Bowlby（1973）やMain et al.（1985）は、IWMが鈍型のように固定されたものではなく、青年期における形式的操作の発達や新たな愛着対象との関係によって変化しると仮定している。従来の愛着研究ではIWM概念の有効性を強調するためにその恒常性に目が向けられがちであったが、「被育児体験をもととする表象モデルが、ソーシャルサポートや環境に潜むストレスなど、その時にの現実の状況に接してどう変化し、再制化されるかという観点（遠藤, 1992）」が、生涯発達や臨床的介入を考える上で今後ますます重要性を増すだろう。実際に長期に渡る縦断研究がいくつか行われているが、それらをも概観したvan IJzendoorn（1995）によれば、人生早期の経験が後の愛着表象を特徴づけているのは個人をとりまく環境が安定している場合であり、乳児から成人までの愛着は必ずしも直線的に関連しないだろうと結論づけている。

(3) Adult Attachment Interviewの成立

IWMの実証研究では、幼児期には観察・実験、児童
期には投影的手法などが開発され、青年期以降には半構造型面接のAdult Attachment Interview (AAI: George, Kaplan & Main, 1996; Main & Goldwyn, 1998)が用いられている。AAIとは、幼少期の愛着対象との思い出を尋ね、語られる内容だけでなく話の一貫性や面接態度も分析の対象として、個人をいくつかのタイプに分ける面接方法である。そして、その評定基準は会話の公認（Cooperative Principle）に依拠しているのが大きな特徴である。会話の公認とは、言語学者のGrice（1975）によって公式化された4つの法則で、真実性に満ちた内容の根拠があること（質：qualitiy）、簡潔かつ完全であること（量：quantity）、問いに対する関連することが適切に語られていること（関連性：relevance）、明確で秩序だっていること（様式：manner）である。

AAIの信頼性・妥当性は、欧米圏ではおおむね検証されており、知性や発話スタイルとAAIは有意に関連しない（Bakermans-Kranenburg, & van IJzendoorn, 1993）。ただ、社会的望ましさや一般的な語りのスタイルとは関連がないものの、IQや現在の一般的な社会的適応性と有意に関連しているとする報告もみられる（Crowell, Waters, Treboux, O'Connor, Colon-Downs & Feider, 1996）。日本では、数井・遠藤・田中・坂上・菅沼（2000）が母親のAAIと幼児の愛着行動との関連をみていている。しかし、愛着表現の測定法としてのAAIの信頼性・妥当性は、日本において未だに検討課題となっている。

(4) 本研究の目的

本研究の目的は、過去の親との関係についての語りによる親への愛着表現が、妊娠と青年女子のどのような発達的差異となってあらわれるかを調査することである。

それと関連して、妊娠と青年女子それぞれのAAIによる愛着表現が現在の対人関係における認識とどう関連するかを調べる。先に述べたように、個人がIWMによって対人的な情報を処理しているならば、対人係用における主観的な認知はIWMによって規定されると思われるからである。

妊娠期は、夫だけでなく胎児との関わりが始まり、新しい愛着対象とのやりとりから親との愛着が再構築される時期であると思われる。また、青年期は、自己や他者の感情や行動について理解が進み、今までの親との関係性についての見直しが発達課題となる。両時期はともに、過去の自分や他者の行動や感情などの活性化から徐々に整理されることによって、愛着に関するIWMが再構成される可能性があるだろう。

また、妊娠と青年女子の比較検査を通じて日本におけるAAIの妥当性について検討を加えることとする。

II. 方 法

（1）妊娠群

(a) 調査協力者 N大学附属病院産科を受診した妊娠4〜6か月の女性66名であった(平均年齢29.2歳、20〜40歳)。

初産婦は50名、経産婦は16名、不明は7名だった。

本調査の妊娠に関するデータは、「おやさんこれらもメンタルヘルスに関する継続的調査」（藤井、金子・瀬田・佐々木・氏家・村瀬・本城・荒井・岩垣・緑原・三輪・迫吹・石原・猪子・板倉、2002）の一部を使用した。

(b) 実施期間 1998年10月から2003年1月

(c) 手続き 調査協力者に対し、継続研究の初回調査の際にAAIを依頼して、その約1か月後に著者らが中心となったAAIを実施した。また、そのうち55人に対して、2〜3か月後の検診時に質問紙調査を実施した。追跡率は83.8%だった。

（2）青年女子群

(a) 調査協力者 N市および近辺の大学・短大の授業などの呼びかけによって協力を得た短大・大学生女子22名であった（平均年齢19.5歳、18〜24歳）。そのうち、自宅生は14名であり、下宿生は8名であった。

(b) 実施期間 1997年9・10月および2003年9月

(c) 手続き AAIを実施した約1か月後に質問紙を郵送し、そのうち19名が返送された。質問紙の回収率は86.4%だった。

（3）両群の調査内容

① Adult Attachment Interview (AAI)

AAIは、要約時間1時間程度の半構造型面接であるが、Table 1に質問内容、評定スケールおよびカテゴリーについて概要を示す。質問は、幼児期における両親との関係を最もよく表現されるといわれる経験を選んでもらいそれについての思い出を聞いたり、両親から拒否されてやつされたり経験があったか、なぜ両親がどのようにふるまったと思うか、両親と自分の関係は小さい時からどのように変わってきたか、幼い頃の経験が現在の自己にどのように影響を与えるか、といった項目から構成される。面接は逐語記録をおこなった後に、親との愛情的な結びつき、役割逆転の有無、話題内容の一貫性など16のスケールによって評定され、最終的にはF型やDs型、E型といった5つのカテゴリーのいずれかに分類される。
Table 1. Adult Attachment Interview 実施の要約

(1) AAIの主要な質問内容（George, Kaplan & Main, 1996）

①「初めて、あなたが幼い頃のご家族の状況やお住まいについて教えていただけませんか。
どこで生まれましたか、引っ越したことはありますか、ご家族はどのように生計をたてていましたか」
②「あなたが思い出せる頃までかのぼって、幼い頃のご両親との関係を話し合っていただけますか」
③・④「幼い頃のお母さん／お父さんとの関係を表した形容詞か単語を5つ選んでください。
それからどうしてそれを選んだのかをお尋ねします」
⑤「あなたはご両親のどちらに親しみを感じていましたか、それはどうしてですか」
⑥「幼い頃に混乱した／怪我した／病気になったときはどうでしたか」
⑦「ご両親と初めて離れ離れになったのはどのようなときでしたか」
⑧「子どもの頃に拒否されたと今までに感じたことがありますか」
⑨「例えしつけのためや児童であっても、今までにご両親があなたを脅かしたことがありましたか」
⑩「ご両親とのこのような経験はあなたの性格にどのように影響していると思いますか」
「あなたが後戻りできたらと感じる、幼い頃の経験はありますか」
⑪「子どもの頃にご両親はなぜそのようにふるまったのだと思いますか」
⑫「子どもの時にあなたがご両親のように親しくしていた大人は他にいましたか」
⑬「あなたは幼い頃もしくは大人になって親しい方を亡くされたことがありますか」
⑭「すでに話しになった大変な経験以外に、密かに傷ついている経験はありますか」
⑮「幼少期以降にご両親との関係は変化しましたか」
⑯「大人になった現在、あなたにとってご両親との関係はどうですか」
⑰～⑲（仮定された）子どもについての質問

(2) AAIの評定スケール（Main & Goldwyn, 1998）

以下の①～⑮は、過去の愛着体験に関するスケールであり、それ以降の⑯～⑲はその愛着に対する現在の心的状況に関するスケールである。いずれのスケールも9段階評定となっており、最終的に愛着体験よりも現在の心的状況を重視して適切なカテゴリに当てはめる。
①愛情（Loving）…親から愛情のこもった行動を経験した程度
②拒絶（Rejecting）…親が子どもの愛着を拒絶・回避した程度
③巻き込み／役割逆転（Involving/Role-Reversing）…親自の物理的・心理的な世話に子どもを巻き込む程度
④達成への圧力（Pressure to achieve）…勉強や手伝いを達成するために圧力をかけられる程度
⑤ネグレクト（Neglecting）…親が物理的・心理的に近接不可能な程度
⑥親の理想化（Idealization of the parents）…親への観念が有意的レベルと具体的レベルで矛盾する程度
⑦親へのとらえによって生じる怒り（Involved/Involving Anger）…現在怒りに巻き込まれている程度
⑧親への侮蔑や軽蔑（Derogating dismissal of attachment）…愛着関係を冷淡にみなし軽蔑する程度
Adult Attachment Interview に関する予備的検討

⑨想起の困難（Insistence upon inability to recall childhood）…幼少期について想起できない程度
⑩メタ認知過程（Metacognitive monitoring）…面接中に思考・想起の過程をモニターして報告する程度
⑪会話での消極性やあいまいさ（Passivity or Vagueness in Discourse）
…あいまいさや奇妙な表現、文の未完、主語の混同
⑫喪失への不安（Fear of the child through death）…我が子を失うのでないかという根拠のない不安
⑬未解決の喪失体験（Unresolved states of mind with respect to experiences of loss）
…愛着対象の喪の作業の程度
⑭未解決の虐待経験（Unresolved/disorganized/disoriented response to abuse）
…外傷体験が未整である程度
⑮記述の一貫性（Coherency of Transcript）…Grice の 4 つの公準を満たす程度
⑯精神の一貫性（Coherency of Mind）…思考の内的一貫性の程度

(3) AAI のカテゴリー（Main & Goldwyn, 1998）

① F 型（Secure/Autonomous type；安定・自律型）
インタビューを通じて一貫して協力的な会話。愛着に価値を置いて、どのような特別なできごとや関係も客観的にみない。愛着体験の良し悪しに関係なく、その描写や評価が矛盾しない。会話が Grice の 4 つの公準に著しく違反することはない。
② Ds 型（Dismissing type；愛着軽視型）
会話に一貫性がない。愛着体験/関係について脱愛着している。一般化された育児歴の表象が、自伝的なエピソードによって支持されなかったり、一般化されてひどく矛盾している（例「とてもあたりまえですぱらしい母親」）。そのため、Grice の公準の「質」に違反する。逐語もまた公準の「量」に違反して、極端に簡潔になりやすい。
③ E 型（Preoccupied type；とられ型）
会話に一貫性がない。過去の愛着関係/経験にとらわれている。話し手は怒っており、消極的もしくはびくびくしている。しばしば文が冗長で、文法的にも錯綜し、はっきりしない用法に満ちている。そのため、Grice の公準の「様式」と「関連性」に違反する。逐語は極端に長く「量」に違反する。
④ U 型（Unresolved/disorganized；未解決型）
喪失/被虐待体験に関して、論理的思考や会話のミ deallocing が著しく欠如する。例えば、亡くなった人についてまだ生きているかのように話し、義理上の会話を見る。U 型に当てはまる場合は、第一カテゴリーとして U 型を、第 2 カテゴリーとして F, Ds, E 型のいずれかを評定する必要がある。
⑤ CC 型（Cannot Classify；分類不可型）
E 型と U 型が混じり、論理的思考に欠けている。
第2章 質問紙
「対人関係における他者と自己についての認識（対人関係の認識）尺度」として「内省的・自閉症性・モデル測定尺度（久保田、1995）」を使用した。この尺度は、愛着理論を愛着関係にまで拡張したHazar & Shaver（1987）のattachment style尺度に基づき構成された「愛着スタイル尺度（著者・戸田、1988；戸田、1988）」を参考に、久保田が改変したものである。本尺度は計22項目からなり、一般的な対人態度について「決してそうでない（1点）から「全くそのとおり（6点）」の6段階で回答を求めた。

III. 結果と考察

(1) AAIカテゴリーの比率

(a) 国内外の先行研究との比較

AAIの遂行法は、Main et al.（1998）に従い、第一・第二著者がそれぞれに独立評定を行った。両者は1998年7・8月にテキサス州立大学においてAAIの研修を受け、2001年に正式なコーダー資格を取得している。その比率は、全体では82.5％、覚醒群では覚醒群は83.5％、そして青年異性群では80.9％だった。不一致だったものは、評定者同士の話し合いによって一致させた。

妊娠群のカテゴリーは、F型50名（75.8％）、D型14名（21.2％）、E型2名（3.0％）となった（Figure 1）。青年異性群では、F型14名（63.6％）、D型7名（31.8％）、CC型1名（4.5％）となった（Figure 2）。他のカテゴリーの該当者はみられなかった。

van IJzendoorn & Bakermans-Kranenburg（1996）は先行研究におけるAAI分類の比率を母親や父親、青年と対象群といった対象ごとにまとめてメタ分析を行っている。その中での対義語的関係のない母親を対象にした13の研究では、F型55％、D型16％、E型9％、U型とCC型の合計は19％となった。また、青年を対象にした4つの研究では、F型48％、D型21％、E型13％、U型とCC型の合計は20％となった。

日本の母親にAAIを実施した数倉から（2000）の4分類の結果は、F型66％、D型20％、E型6％、U型8％であった。本調査や数倉からの日本人データからは、欧米のvan IJzendoornらの結果と比較してE型の比率が低く、相対的にF型が多いという共通性が認められる。

E型が少ない理由としては、第一にE型の大きな特徴である「親へのとらえ方によって生じる怒り」が、日本人では出来上がにくいことが考えられる。Markus & Kitayama（1991）は欧米と日本の比較から、欧米人は独立な自己理解をして自分の気持ちを非言語的な行動で率直に表現するが、日本人は相互依存的な自己理解をすると考察している。さらに、日本人は自己発想の制限である内在的属性により他者の態度に注意を向けやすいために、怒りなどの感情発露が抑制されやすいと述べている。つまり欧米と比べると、日本の人際協力者は人間性を強く意識して、内面的な怒りをそのまま発露することを少ないと考えられる。第二に、E型では「会話での消極性やあいまいさ」が1つの特徴とされる。しかし、日本語の会話では主語の省略や語尾の倒置といった用法が特徴ではないことが、E型の少ない理由として考えられた。

F型の割合の多さに関しては、本調査では大学病院を受診する妊婦や妊娠群や短大での高等教育を受けている青年女子が対象であり、知的水準や社会階層が高いことが関与しているかもしれない。学歴について回答のあった59人の妊婦のうち、短大卒が33.9％（20名）、大学・大
学院卒が42.4％（25名）と比較的高学歴だった。数井ら（2000）の調査対象も、大学卒が32％、大学・大学院卒が34％であり同様に高学歴の傾向がみられる。前述のvan IJzendoornらのメタ分析結果からは、社会階層の低い群のAAIは一般的な母親群と比較して有意にF型が少なくD型とU型が多いという報告がなされている（van IJzendoorn & Bakermans-Kranenburg, 1996）。

次に、本調査でU型が全くみられなかった理由について考察したい。数井らはそのデータでU型が少なかった理由について、お盆に死者がこの世に戻ってくると考えるような日本の文化・宗教の背景を鑑みて、U型を厳密に定義したためであると述べている。同様に本調査の評定では、生まれ変わりや虫の知らせといった日本人の思想や宗教観が影響を与えた。いずれも日本では一般的な考えであるが、キリスト教を中心とする文化圏では死者にとらわれている奇異な語りとみなされる可能性がある。

また、F型の被験者であるAさんは、喪失体験についての問いに対して、親の死を契機として身体の不調が生じたと述べていた。文化心理学の立場から北山（1998）は、日本や中国などの非西欧社会では、感情の知覚より「疲れ」や「つらこり」といった身体感覺が株しやすいこと、そのような「身体化」においては内癒感覚を外的現実に統合するよりもより切り離して考えることを述べている。Aさんの場合は自ら身体症状を他者の喪失体験と関連づけていが、中には意識しないままに症状を抱えている場合もあるかもしれない。このような未処理な感情が身体化される問題について、U型で主な判断スケールとなる「未解決の喪失体験」には明記されていない。日本におけるU型の妥当性は今後の検討課題であろう。

(b) 妊婦と青年女子との比較

妊娠と青年女子の分布を比較すると、妊娠より青年女子でF型が少なくD型が多い傾向があった。van IJzendoorn et al.（1996）では、母親群と青年群の比率に有意な偏りはなかったものの、母親群より青年群でF型が少なくD型が多い傾向があった。

さらに詳しく検討するために、妊娠と青年女子それぞれのD型サブカテゴリーの比率に注目した。すると、D型の妊娠では拒否の経験が組み合わされるものの親の理想化を主な特徴とするDs3b型がD型全体の35.7％（5名）であり一番多かった（Figure 1）。また、青年女子のD型においては親を軽蔑して無愛着を示す傾向の強いDs2型が約半数（3名）を占めた（Figure 2）。

このように、妊娠よりも青年女子において、D型が高頻度でありD型の中でもDs2型が多くかった。

Main & Goldwyn（1998）やHesse（1999）はAAIでの応答に感情が果たす役割について説明しているが、F型では穏やかさ（forgiveness），同情（compassion），ユーモア（humor），他者を求めることの言及（reference to need others）が当てはまるとしている。つまり、親を批判する際にもユーモアを交えるなどしてバランス感覚が保たれること、親の不完全さを許容して親の立場への共感的な理解が誘われることがD型の特徴である。一方、Ds型では自発的な感情表現が著しく欠如しており、軽蔑（contempt）が指標となると述べている（Hesse, 1999）。

青年期は、一般に親からの心理的自立が発達課題とされる。Allen & Land（1999）は、青年期が親から自立するのに伴い、親との愛着関係を再評価するために、認知能力の発達や批判的な心理的距離が必要であるとしている。このように、親について相対的な客観的評価できる発達的側面が顕著にあらわれる一方で、親への脱理想化やそれに伴う反抗が生じやすい時期といえる。

Blos（1979）は、青年期の親からの第二の分離個体化過程のモデルを提示したが、青年初期では親への反抗や批判が高まるもので、次第に親が良い面でも悪い面も持った全体対象としてみせるようになると述べている。本調査でも、F型のある青年女子は、親の理想とその現実のずれに失望していたけれども親にも欠点があって当然だと思うようになったと言った。また、親自身は自分が子育てに影響していることへの気づきが語られることもあった。

それだけではなく、愛着関係を重要視しないD型ではそもそも結婚・出産といったライフコースが選択されにくいことが推測される。例えばD型の青年であるBさんは、仮定された子どもについての問い（質問17）に対して以下のよう答えている。

3）D型のサブカテゴリーは以下のとおりである。
Ds1型…幼少期の記憶の欠如が著しい。親は理想化され、具体的なエピソードによって支持されない。
Ds2型…愛着関係を価値のないものとみなし、むしろ積極的に非難する。
Ds3a型…親に拒否されたことは認めるもの、その影響は認めない。
Ds3b型…親に拒否されたことは認めるもの、その影響は認めない。
Ds4型…特に原因がないのに、我が子の死をおそれる。
Bさん：「…子ども絶対はしくないっていうが、生みたくないんですよ、子ども。でも、まあ生きていく上でいいくらいじゃないかなと思って、「養子かなー」とか「難しいなー」とか出てくる。子ども持ってみてっても、あんまり思いつかないです。

将来のライフコースは不確定であるが、現在のBさんは出産について拒否的な態度を持っている。人が親となる準備段階ではナーチャランス（nurtureance）の発達が重要だとされる（小崎, 1994）。ナーチャランスとは、「相手（生きししとしやけるも）の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」を意味する。Bさんは子どもの有無の希望について自分にとっての利便性からとらえており、ナーチャランスについては発達途上にあるといえよう。

Erikson（1959）が成年期の発達課題として「親密性」を挙げたように、結婚して家庭生活を形成していくためには他者とのより親密な関係が求められる。Crowell（2002）は結婚の前後2回にわたりカップルにAAIを実施したが、結婚によって安定型はほとんど変化しなかったのに対して、不安定型の1/4が安定型に変化したと報告している。これらのことから、既に結婚・妊娠を経験している妊婦では、青年女子と比べて親愛意を特徴とするDs型が少なかったことが推測された。

また、妊婦は面接の中で親への感謝の気持ちを述べることが多かった。妊婦の多くは、現在も実家の方に居住し家族と頻繁に行き来したり、実家から離れていても里帰り出産を希望している。例えば、E型の妊婦であるCさんとDさんは「今ご両親に満足していることは何ですか」という問いに対して、以下のように述べている。

Cさん：「うーん、あたりまえの感謝かな。[実家に]帰りたかった。もうでも入り、や、やってくれるというか」「楽ですね。うち帰りと（笑）」「離れてるから、なおあんななだろうけど、ありがたいですね。[今も実家に]早く帰りたいです」

Dさん：「うーん、そうですね。うーん、まあいくら家を出てもやっぱり結婚したほうがお金もあまりないだろうから考えて、実家に帰りたいものがあるのかも知れないか（笑）。うん、やっぱり親自体がしてもらったみたいなんですね、そうやって、だから自分の子供にもいてほしいのはあるみたいで、うん、それこそ妊娠してアパートも空けると、きらいな目の中子産まれるとか言いますよね、親自体も食べさせてくれたんだで、ただしあっても、やっぱり自らもしてもらったことは子どもにもってやりたいといったかなっても、うん、なんだかちょっと前もって、それがいて、もっと親からもしてもらったかということがたい Vaderしにこの、生活自体がどうか。」

このように、妊婦からは親からやる物質的なサポートを受けている現状が類繁に語られた。春日井（1997）は、成人期の子どもの親子関係に注目した研究から、母子間の接近や援助は娘の妊娠・出産によっていっそう広がると同時に、娘の出産によってそれまでにない水準まで親母の援助が増加することを示している。親からサポートにおいて感謝の気持ちを経験することが、結果として妊娠のP型の多さに寄与したと思われる。

(2) AAIと対人関係の認識との関連

次に、AAIと対人関係の認識との関連を調べるためには、AAIカテゴリーからP型のみならずこれら以外のDs型、E型、CC型を含むnon-F群に分けた。妊娠はF群が42名、non-F群が42名だった。青年女子

対人関係の認識尺度については、訳摩・戸田（1988）の3つの因子構造に従って下位尺度を構成した。【「私は人よりも知り合いができやすい方だ」といった良い対人関係の評価に関する項目からなる「親和性」の項目は、「私はもはや知り合いだしな私」という評価が低く不安になりやすい項目からなる「対人不安」の項目は、「人に頼るのは好きでない」といった、深い対人関係を避ける項目からなる「対人回避」の項目を計8項目である。それぞれの項目得点を算出して、下位尺度の合計得点とした。

Table 2に、対人関係の認識の下位尺度の平均値を、妊婦・青年女子の群ごとに、また妊婦・青年女子群のF群・non-F群ごとに示す。

Table 2との対人関係の認識の下位尺度の平均値を、妊婦・青年女子の群ごとに、また妊婦・青年女子群のF群・non-F群ごとに示す。

Table 2に、対人関係の認識の下位尺度の平均値を、妊婦・青年女子の群ごとに、また妊婦・青年女子群のF群・non-F群ごとに示す。

Table 2に、対人関係の認識の下位尺度の平均値を、妊婦・青年女子の群ごとに、また妊婦・青年女子群のF群・non-F群ごとに示す。

これまでの人々の間では、AAIのF型群とnon-F型群を対人関係の認識の母子関係を従属変数とする検定を行った。その結果、青年女子においてのみnon-F型群の対人関係の認識が有意に高く、「対人不安」が低かった（それぞれ、t（16）=3.52, p<.01; t（16）=2.69, p<.05）。それ以外では有意差がみられなかった。

以上のような結果から、妊婦よりも青年女子では人との交わりで自信を失ったり不安を感じやすいといえる。また、
## Table 2 対人関係の認識下位尺度の平均値

<table>
<thead>
<tr>
<th>下位尺度名</th>
<th>α係数</th>
<th>対象</th>
<th>全体平均</th>
<th>F群平均</th>
<th>non-F群平均</th>
<th>t値</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>親和性</td>
<td>.639</td>
<td>妊婦</td>
<td>21.9</td>
<td>22.0</td>
<td>21.8</td>
<td>0.12n.s.</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>青年女子</td>
<td>21.3</td>
<td>22.8</td>
<td>18.0</td>
<td>3.52**</td>
</tr>
<tr>
<td>対人不安</td>
<td>.766</td>
<td>妊婦</td>
<td>15.7</td>
<td>15.8</td>
<td>15.2</td>
<td>0.63n.s.</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>青年女子</td>
<td>20.6</td>
<td>18.8</td>
<td>24.3</td>
<td>-2.69*</td>
</tr>
<tr>
<td>対人回避</td>
<td>.568</td>
<td>妊婦</td>
<td>16.3</td>
<td>16.1</td>
<td>16.8</td>
<td>-0.61n.s.</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>青年女子</td>
<td>17.1</td>
<td>16.4</td>
<td>18.5</td>
<td>-0.83n.s.</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* p < .05  ** p < .01

親への愛着が不安定な青年女子は安定している青年女子よりも、人と親しくなることに困難を感じたり対人関係で不安を感じやすいといえる。このように、妊娠よりも青年女子で、現在の対人関係についての認識がAAIによって影響されやすいことが示唆された。

その一方で、妊娠ではAAIが対人関係のとらえ方に関連しないことが示された。その理由として、妊娠・出産期以降の子育てにおいて、母親は家族や周囲の人々、医療機関や地域の自治体からの情報・経済的な援助を受ける機会が多く、対人認知が変化が生じる可能性が挙げられる。氏家（1999）は、人間関係によるあたって母親、祖父母や保育者といった「親的」な人に限らず、より多くの他者から援助を受ける体験がその発達を支援するとしている。

特に、結婚・妊娠期は母親や父親などの一次的な愛着対象から夫や胎児といった新しい愛着対象に移行していく時期であり、各対象の対人関係の関与度が変化することもある。Rick（1983）は結婚から親となるまでの間で、secureな愛着を与える配偶者が相手のIWMの再構築を促すことを示している。

妊娠中から母親はすでに胎児への愛着を感じはじめる（Klaus, Kennel, Plumb & Zuehlke, 1970）。また、子育てにおいては母親自身の接育体験の記憶が呼び起こされやすい。つまり母親が子どもと向きあうと、母親のIWMが活発に働き始め親子の相互作用を促進する（Vondra & Belsky, 1993）。そのような親子関係の作用によって、愛着対象についてのIWMも変容していくことが想定される。しかし、それを実証するためには、出産後も調査を継続して、夫や子どもとの関係、周囲からのサポートなどの変数を含んだモデルを構成する作業が必要だろう。

### 3. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、親への愛着表現の測度としてのAAIの分類の比較、およびAAIと自己や他者における対人関係の認識との関係を調査した。その結果、AAI分類の比率が妊娠と青年女子で異なる様相を呈した。また、青年女子ではAAIと対人関係の認識で一定の関連がみられた。これらの結果から、横断的調査という限界はあるがAAIにおける妊娠と青年女子の発達の差異について考察した。

また、全体的なAAI分類の比率においても従来の欧米の結果と異なる傾向がみられた。そもそもAAI分類は、乳幼児の愛着行動の観察法であるストレンジー・シチュエーションの各タイプからその母親の面接での特徴を対応させる過程で作成されてきた（Hesse, 1999）。アメリカの結果をと比べ、日本のストレンジー・シチュエーション分類の割合はアンビバレント型が多く、ドイツでは回避型が多いことが報告されている（三宅, 1990）。このように、愛着パターンには文化差があり、日本でのAAIの分布についても欧米の結果と異なることは十分予想されることであった。

本調査のAAIの評定からは日本人の出生観や宗教観、日本語による会話の特徴や感情表現の仕方、身体化の問題といった側面で欧米との文化差が問題となった。しかし、その出現がまれであったため、サンプルを増やして
資料

今後も異文化間妥当性についての検討を継続する必要がある。

また、AAIと対人関係の認識との関連が青年女子ではおおむね検証されたといえる。ただ、IWMが現在の対人関係にどう影響しているかということだけなく、逆の方向性も問題とされなければならない。認知・情感情的に行われた実験の記憶は、経験そのものの完実な記憶が残るというよりも後から振り返って当時の記憶が再構成される（Nigro & Neisser, 1983）。過去の影響や現在の状況を一方的な規定するよりも、過去の実体験とその主観的な意味づけ、そして現在の状況が、それぞれに作用し合っていると考える方が適当であるよ。

最後に、著者らの参加する妊娠調査では、ハイリスク出産のおそれがある妊娠にAAIを実施して、出産後の心理的援助に生かす試みを行っている（鷺地・佐々木、金子、村瀬・本城、印刷中）。日本でのAAIの妥当性をふまえつつ、このような臨床的介入における適応可能性について今後の活発な議論が望まれる。

引用文献


George, C., Kaplan, N., & Main, M. 1996 Adult Attachment Interview (3rd ed.). Unpublished manuscript, Department of Psychology, University of California, Berkeley.


Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. Journal of Personality and Social Psychol-
三宅和夫 1990 子どもの個性 東京大学出版会
瀨野山菜矢 佐々木靖子 金子一史 等 研究助成論文集/安田生命社会事業団 37, 39-46.
春日井典子 1997 ライフコースと親子関係 行路社
数井みゆき 谷藤利彦 田中英男 佐上裕子 青沼真樹 2000 日本人親子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究 48, 323-332．
北山忍 1998 自己と感情 - 文化心理学による問いかけ - 共立出版株式会社
小嶋秀夫 1994 青年の親とおなる過程 久保田敏雄編 現代青年の心理と病理 福村出版 Pp.95-110．
久保田敏雄 1995 アタッチメントの研究 川島書店
ABSTRACT

A Preliminary Study of the Adult Attachment Interview: Comparison of Pregnant Women and Adolescent Women in Japan

Yasuko Sasaki, Haya Sechiyama, Shuji Honjo

The purpose of this study was to examine the aspect of developmental difference regarding the Adult Attachment Interview (AAI), which is a semi-structured interview for assessment of the present state of mind with respect to attachment. Pregnant women and adolescent women were surveyed using the AAI and a questionnaire addressing cognition of interpersonal relationship.

Comparing the category distribution of AAI classifications in our sample with that obtained in preceding studies in Europe and America, a higher proportion of the F type, lower E type, and absence of the U type was noted in our sample. Within our sample, a higher proportion of the Ds type was found among adolescent women in comparison to the pregnant sample.

In subsequent analysis, the association with interpersonal cognition was explored dividing the AAI classifications into two — the most prevalent F type versus the non-F type. Although no significant association was found between the AAI and interpersonal cognition for pregnant women, higher scores were noted for the "intimacy" and "interpersonal anxiety" subscales of interpersonal cognition among adolescent women of the non-F type. These results were employed to examine the developmental transition from adolescence to parenthood, and the validity of using the AAI in Japan.

Key words: Adult Attachment Interview, internal working model, cognition of interpersonal relationship, pregnancy, adolescence